

谷 上 古 墳

- 福岡市西区今宿上ノ原所在の谷上B1号墳の重要遺跡確認調査報告 -

1997

福岡市教育委員会

谷上古墳

- 福岡市西区今宿上ノ原所在の谷上B1号墳の重要遺跡確認調査報告 -



遺跡略号TNK-B-1
調査番号9549

1997

福岡市教育委員会

序

「活力あるアジアの拠点都市」を目指して都市づくりを進めている福岡市は、古くから我が国と大陸との主要な交流の窓口でした。とりわけ、市域の西部に位置する今宿平野は「魏志倭人伝」にある「伊都國」に含まれることから、対外交渉を示す数々の貴重な遺跡が残されています。特に、古墳時代の今宿平野には13基もの前方後円墳が造られており、ここを支配した首長層の系譜や当時の社会体制を考える上で重要な地域であります。

これまで福岡市教育委員会では今宿平野に所在する前方後円墳の歴史的意義付けのため、重要遺跡確認調査を行ってきました。今回報告する谷上B1号墳の調査もその一環で行われたもので、古墳の時期や規模を把握することができました。本書は1996年に行った調査の記録を報告するものです。

本書が市民の皆様への埋蔵文化財保護への理解と地域の歴史を知る上での助けになり、また、研究資料としてご利用頂ければ幸いです。

最後に調査にご協力を頂いた地権者の野坂英毅様、吉積久敏様、吉積司也様をはじめとする関係の方々には厚くお礼申し上げます。

平成9年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊

例言

- 1.本書は1995年度に福岡市教育委員会が国庫補助を得て調査を実施した、谷上古墳群B群1号墳の重要遺跡確認調査の報告書である。本書では古墳の名称を「谷上B1号墳」と略して記述する。
- 2.本書に使用した遺構の実測は菅波正人、白井克也、岸本圭、辻出淳一郎、遺物の実測図は林田憲三、大橋隆司、菅波が行った。製図は林田が行った。
- 3.本書に使用した遺構、遺物の写真は菅波、白井が撮影した。
- 4.本書に使用した座標は国土座標第II座標系である。方位は磁北で、座標北から6°21'西偏する。
- 5.本書の執筆、編集は林田の協力を得て、菅波が行った。なお、第4章で古墳の周辺遺跡の資料として、横山邦雄氏(福岡市教育委員会)、大橋隆司氏(牛津町教育委員会)が採集した新開窯跡群の須恵器を掲載した。
- 6.本報告に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに取蔵、保管される予定である。

調査地点	谷上B1号墳1次調査	調査番号	9549 TNK-B-1	地図番号	青木113 0647
所在地	西区今宿上の原イヤソノ	調査面積	80 m ²	調査期間	1996.01.10~02.29

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
1. 位置	2
2. 周辺の遺跡	2
3. 今宿平野の群集墳	4
4. 今宿平野の前方後円墳	5
第3章 調査の記録	11
1. 立地	11
2. 調査の経過	12
3. 墳丘	13
4. 横穴式石室	17
5. 出土遺物	20
6. まとめ	23
第4章 新開窯跡群採集資料の紹介	25

挿図目次

Fig. 1 今宿平野の主な遺跡 (1/25000)	3
Fig. 2 今宿平野の前方後円墳1 (1/800、1/80)	6
Fig. 3 今宿平野の前方後円墳2 (1/800、1/80)	8
Fig. 4 今宿平野の前方後円墳3 (1/800、1/80)	9
Fig. 5 谷上B1号墳位置図 (1/2500)	11
Fig. 6 谷上B2号墳石室実測図 (1/40)	12
Fig. 7 谷上B1号墳現況測量図 (1/300)	14
Fig. 8 谷上B1号墳トレンチ位置図 (1/300)	15
Fig. 9 谷上B1号墳墳丘土層図 (1/60)	16
Fig. 10 谷上B1号墳石室実測図 (1/40)	18
Fig. 11 谷上B1号墳閉塞土層実測図 (1/60)	19
Fig. 12 谷上B1号墳出土遺物実測図1 (1/3)	21
Fig. 13 谷上B1号墳出土遺物実測図2 (1/1、1/2、1/3)	22
Fig. 14 谷上B1号墳墳丘復元図 (1/600)	23
Fig. 15 新開窯跡群採集須恵器実測図 (1/3)	26

図版目次

- 扉 平野から古墳の立地する丘陵を望む(中央下は今宿大塚古墳)(北から)
- PL.1 1. 谷上B1号墳遠景(古墳の位置は鉄塔の間にあたる)(東から)
2. 谷上B1号墳遠景(古墳の位置は鉄塔の間にあたる)(南から)
- PL.2 1. 後円部墳丘(南から)
2. 後円部南の平坦部(北から)
- PL.3 1. 後円部と前方部の接合部(北から)
2. 前方部墳丘頂部(南から)
- PL.4 1. 前方部墳丘前面(北から)
2. 前方部北の平坦部(南から)
- PL.5 1. 後円部1 トレンチ南(北から) 2. 1 トレンチ南SX-01(南から)
3. 1 トレンチ南遺物出土状況(西から) 4. 後円部1 トレンチ北(南から)
5. 1 トレンチ北遺物出土状況(北から) 6. 1 トレンチ北断ち割り土層(東から)
- PL.6 1. 後円部3 トレンチ土層(南から) 2. 前方部2 トレンチ北(南から)
3. 前方部2 トレンチ南土層(東から) 4. くびれ部4 トレンチ(西から)
5. 前方部5 トレンチ(北から) 6. 前方部6 トレンチ(北から)
- PL.7 1. 石室奥壁(南から)
2. 石室玄門部(北から)
- PL.8 1. 石室右壁(西から)
2. 石室左壁(東から)
- PL.9 1. 石室奥壁左隅角(南から)
2. 石室奥壁右隅角(南から)
- PL.10 1. 閉塞部外面(南から) 2. 閉塞部外面(北から)
3. 閉塞部断ち割り土層(西から) 4. 閉塞部断ち割り土層(南から)
5. 前庭部(南から) 6. 前庭部前面の炭化物(南から)
- PL.11 1. 谷上B2号墳石室(東から)
2. 谷上B2号墳石室玄門部(西から)
- Pl.12 谷上B1号墳出土遺物
- PL.13 新開窯跡群採集遺物1
- PL.14 新開窯跡群採集遺物2

第 1 章 はじめに

1. 調査に至る経緯

谷上古墳群B群1号墳（以下、谷上B1号墳とする）は福岡市西区今宿上ノ原字イヤソノ795-1、794-1、796-1外に所在する全長約37mの前方後円墳で、高祖山から北に派生する標高約73～78mの丘陵上に立地する。本墳は福岡市文化財分布地図（西部II）の青木113に前方後円墳として、記載されているが、分布調査以外の調査は行われておらず、その詳細は知られていなかった。

二丈町、前原市、志摩町、福岡市にかけて広がる糸島平野には弥生時代から古墳時代を中心に数多くの重要な遺跡が分布するが、その東側にあたる今宿平野には現在、13基の前方後円墳が知られている（従来の12基に兜塚古墳が加わった）。これまで福岡市教育委員会は今宿平野の前方後円墳の保存を目的とした重要遺跡確認調査を実施し、今宿大塚古墳、鷗崎古墳、山ノ原1号墳、2号墳、飯氏二塚古墳、兜塚古墳等の規模、構造等の把握に努めてきた。今回の調査もその一環で行われた重要遺跡確認調査である。発掘調査は本墳に関する基礎資料の収集を主目的に、現況の地形測量を行った。また、墳丘の各部にトレンチを設定し、規模、構造を把握するとともに、天井石が崩落していた石室の内部を清掃し、石室の実測を行った。

調査は平成8(1996)年1月9日から2月29日にかけて行った。

2. 調査の組織

調査は以下に示す組織構成で実施した。調査の実施に際して、土地の所有者の方々には調査の趣旨にご理解頂き、快く調査に応じて頂いた。また、調査の支障となる樹木の伐採にもご協力を頂き、円滑に調査を行うことができた。また、調査中は石野博信、武末純一、宮本一夫の諸先生をはじめ、埋蔵文化財課の諸先輩、同僚から貴重な助言、協力を賜った。ここに記して謝意を表する。

地権者	野坂英毅 吉積久敏 吉積司也(五十音順敬称略)
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 尾花剛(前任)、町田英俊 文化財部長 後藤直 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝 埋蔵文化財第一係長 横山邦継
調査庶務	埋蔵文化財第一係 内野保基
調査担当	埋蔵文化財第一係 菅波正人、白井克也
調査作業	池弘子 大神マツノ 鬼塚正之 末石修 末松昭子 末松信子 田中安恵 那賀久子 中村弘太 吉井モモエ 三苦ヒサノ 三苦ヨシ子 岸本圭 辻田淳一郎(九州大学) 坪井哲哉(福岡大学)
整理補助	林田憲三
整理作業	富永優子 山田順子 早川晃代(福岡大学)

第2章 遺跡の位置と環境

1. 位置

谷上B1号墳は福岡市西部の今宿平野に位置する。今宿平野は今山～長垂山間の円状砂丘と南側の高祖山の間に形成された小平野で、糸島平野と早良平野の境にあたる。平野は叶嶽～長垂山山塊を東端、瑞梅寺川河口を西端とし、東西3kmをはかる。平野の東部には高祖山と叶嶽の間に扇状地が形成され、西側は後背湿地の沖積地化や近世の干拓等によって陸地となっているが、弥生時代には砂丘の後背湿地が広がっていたことが分かっている。平野の南側には高祖山から派生する舌状の低丘陵がヤツテ状に伸び、間に狭い谷が入り込む。谷上B1号墳はこの低丘陵の東側に立地する。国土地理院刊行の1/25,000の地形図「福岡西南部」では、図幅上端から9 cm、左端から9 cmの位置にあたる。

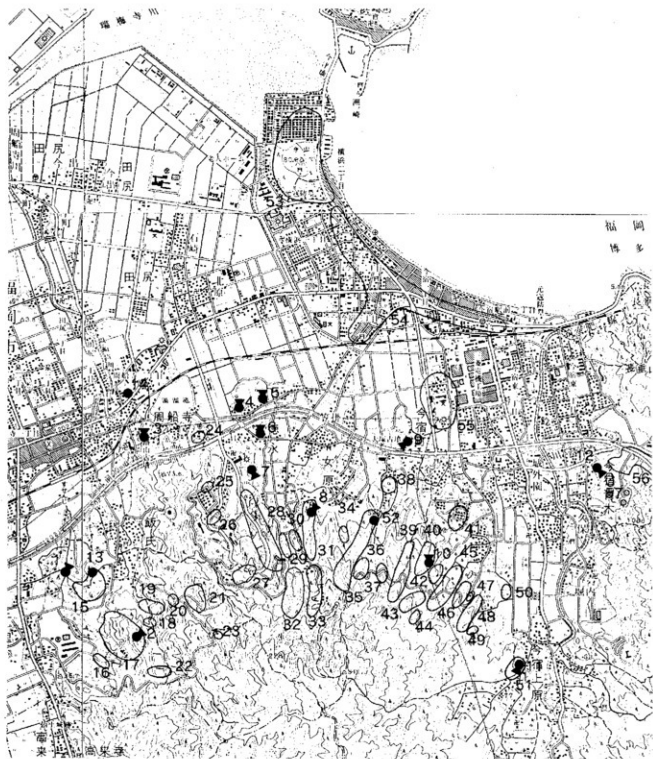
2. 周辺の遺跡

今宿平野の遺跡については柳沢一男氏によって、詳細に触れられているが、ここでは弥生時代から古墳時代の遺跡について見ていく。今宿平野の弥生時代から古墳時代の遺跡の分布は地形的に、海岸線の砂丘上、平野の東部の扇状地、高祖山から伸びてくる丘陵上の3つに分けられる。

砂丘上の遺跡では今宿遺跡があり、弥生時代前期の甕棺墓、土壇墓等が検出され、土壇墓から細型銅剣、硬玉製勾玉が出土している。これまで住居跡等の集落遺構は検出されていないが、弥生時代から古墳時代の土器のほか、銅壺や製塩土器、滑石製鏃等が出土しており、漁業、製塩に係わった集落の存在が予想される。砂丘の西端には玄武岩製石斧の製作跡で著名な今山遺跡がある。

沖積地の遺跡では今宿小学校の改築とその西側の道路工事で調査された今宿五郎江遺跡がある。それらの調査で弥生時代中期後半から後期の環壕や掘立柱建物が発見されている。また、弥生時代後期の大溝から多量の土器、木製品のほか、小銅鐸が出土している。今宿五郎江遺跡は今宿平野の拠点集落と考えられるが、遺跡の範囲、内容はこれからの調査に委ねられる。その他、青木遺跡では弥生時代中期の竪穴住居跡、後期の甕棺墓、鍋崎遺跡では弥生時代中期の竪穴住居跡が発見されている。

丘陵上の遺跡では丘陵の先端部に集落遺跡が発見されている。大塚遺跡高田地区では弥生時代後期後半から古墳時代前期の竪穴住居跡群が発見されている。それから西側に位置する大塚遺跡III区、女原遺跡、徳永遺跡III区では6世紀から7世紀にかけての竪穴住居跡等が発見されている。徳永遺跡III区ではいわゆる「赤焼土器」が多数出土し、須恵器製作工人との関連が指摘されている。時間的には異なるが、南側の丘陵部には第1型式に生産が始まる新開窯跡があることから、これらの関連は注目される。また、生産に関連して、叶嶽～長垂山の西側や高祖山東側から北の丘陵では20カ所の鉄滓の散布地が確認されており、群集墳の鉄滓供献例からも砂鉄を素材とした鉄生産が指摘されてきた。製鉄遺跡の調査例は少ないが、近年行われた鍋崎古墳群の調査で、古墳時代後期から奈良時代に位置づけられる炭窯と製鉄炉が発見された。詳細は報告書待ちだが、この地域の鉄生産の開始期の問題を含めて注目される。これまで確認されている古墳時代の集落の規模はそれほど大きなものではないが、それらの集落は製塩、須恵器生産、鉄生産等の生産活動との関わりが予測される。これらの生産活動や糸島平野と早良平野の境界に位置するという地理的条件を背景に高祖山北側及び長垂山西側の丘陵上には13基の前方後円墳と330基以上の群集墳が営まれることになる。



- | | | | | | |
|------------|--------------|-------------|-------------|-------------|----------------|
| 1. 瓶氏一塚古墳 | 11. 本村A1号墳 | 21. 瓶氏古墳群E群 | 31. 女原古墳群C群 | 41. 谷上古墳群C群 | 51. 本村古墳群A群 |
| 2. 瓶氏B14号墳 | 12. 登崎古墳 | 22. " 1群 | 32. " D群 | 42. 新原古墳群D群 | 52. 新原築路 |
| 3. 丸塚山古墳 | 13. 瓶氏(兜塚)古墳 | 23. " G群 | 33. " F群 | 43. " B群 | 53. 今宿遺跡・今山下遺跡 |
| 4. 山ノ鼻2号墳 | 14. 山崎古墳 | 24. 藤木古墳群A群 | 34. 新原古墳群B群 | 44. " A群 | 54. 今宿遺跡 |
| 5. 山ノ鼻1号墳 | 15. 瓶氏古墳群A群 | 25. " C群 | 35. " C群 | 45. " C群 | 55. 今宿五塚江遺跡 |
| 6. 若八幡宮古墳 | 16. " J群 | 26. " D群 | 36. " D群 | 46. " E群 | 56. 龍崎古墳群A群 |
| 7. 下谷古墳 | 17. " B群 | 27. " G群 | 37. " E群 | 47. " F群 | 57. " H群 |
| 8. 女原C14号墳 | 18. " F群 | 28. " H群 | 38. " H群 | 48. " C群 | |
| 9. 今宿大塚古墳 | 19. " C群 | 29. 女原古墳群A群 | 39. 谷上古墳群A群 | 49. " A群 | |
| 10. 谷上B1号墳 | 20. " D群 | 30. " 3群 | 40. " B群 | 50. " J群 | |

Fig.1 今宿平野の主な遺跡 (1/25000)

3. 今宿平野の群集墳

現在、今宿平野には高祖山北側及び長垂山西側の丘陵上に330基以上の群集墳が知られている。この中には存在のみ知られるが、既に消滅した古墳も含まれる。古墳群は西から飯氏、徳水、女原、谷上、相原、本村、焼山、油坂、鋤崎古墳群が分布する。ここでは主な古墳群を概観していく。

飯氏古墳群 高祖山の北西側の丘陵に広く分布する。丘陵の北側には飯氏塚古墳、兜塚古墳が立地する。古墳群はAからMまでの13支群55基が確認されている。調査例はほとんどないが、B群には前方後円墳が存在する。B14号墳は標高約60mの丘陵上に立地し、北東方向に前方部を配置する。全長24mを測り、主体部に横穴式石室をもつ。今宿平野には群集墳に含まれる小型の前方後円墳が4基あるが、そのひとつにあたる。

徳永古墳群 高祖山から北側に延びる丘陵上のうち、徳水の集落の西南側にあたる谷を挟む丘陵上に分布する。丘陵の先端には4基の前方後円墳が立地する。AからH群までの8群41基が確認されている。古墳群は谷を挟んで西側にAからG群、東側にH群が分布する。これまで、D群の1号、2号、E群1号、H群15～21号墳、6～9、26～28号墳が調査されている。福岡市文化財分布地図（西部II）（1984年）以前はD、E群は徳永アラタ西古墳群、H群は徳永アラタ古墳群と呼ばれていたものである。D群では墳丘の周辺から鉄滓が出土している。H群18号（旧3号）墳は全長7.83mの複室の横穴式石室をもつ。H群16号（旧5号）は6世紀後半の古墳で、玄室から鉄滓（製鉄滓）が出土している。この群では6、7、26号墳が造営開始期にあたる。26号墳は竪穴系横口式石室で、玄室から三葉環頭大刀が出土している。

女原古墳群 徳永古墳群から谷を隔てて東側丘陵の西側斜面に分布する。AからE群までの5群81基が確認されている。このうち、C群には前方後円墳が存在する。C14号墳は小松原1号墳とも呼ばれ、全長30mとされる。標高約45mの丘陵上に立地する。古墳群の北側で調査された今宿小塚古墳は径30mの円墳とされる。古墳群の西側には女原上ノ谷製鉄址がある。近年、発掘調査が行われ、炉壁、鉄滓（砂鉄製練滓）が出土している。製鉄炉等は検出できなかったが、周辺の遺構からは6世紀後半代の土器が出土している。古墳群との関連を含めて、今後の調査が期待される。

新開古墳群 女原古墳群が立地する丘陵の東側斜面を中心に分布する。AからE群までの5群43基が確認されている。これまで古墳群の調査はほとんどないが、C群の中の須恵器の窯跡が調査されている。新開窯跡群は1971年に日本考古学協会技術特別委員会窯業部会の事業として、小田富上雄氏らによって調査され、2基の窯跡が確認されている。小田編年の1-B期に操業の中心があるとされる。

谷上古墳群 新開古墳群の谷を挟んで東側の丘陵上に立地する。AからC群までの3群22基が確認されている。これまでC群の3基が調査されている。2号墳は竪穴式石室、3号墳は箱式石棺を主体部にもつ。ともに4世紀後半から5世紀に位置づけられている。B群には前方後円墳が存在する。

相原古墳群 谷上古墳群の谷を挟んで南東にあたる。AからJまでの10群73基が確認されている。これまでB群3、5、6号墳、C群6、8、9、11、12、21、22号墳、E群1号墳が発掘調査されている。C群は6世紀前半には開始する。B群3号、C群6、9号墳から鉄滓が出土している。

本村古墳群 相原古墳群の南東に位置する。A、B群の2群8基が確認されている。A群の1号墳は前方後円墳であるが、墳丘の大半は削平されている。標高45mに立地し、全長30mとされる。

鋤崎古墳群 長垂山の西側の丘陵斜面にあたる。鋤崎古墳の周辺に分布し、A、B群の2群17基が確認されている。このうち、A群1～13号墳が調査されている。A群は6世紀前半に開始する。ここでは古墳以外に製鉄炉や炭窯が検出されている。9号墳では鉄滓が出土している。

4. 今宿平野の前方後円墳

今宿平野にはこれまで12基の前方後円墳が知られていた。1994年度、これまで円墳と考えられてきた飯氏の丸塚古墳が調査され、前方後円墳であることが判明した。したがって、今宿平野には13基の前方後円墳が存在したことになる。当該地の前方後円墳については柳沢氏によって、立地と規模の相違による区分や時期的な変遷が行われている。氏は12基(当時)の前方後円墳を、丘陵先端に独立的に造営され、墳長50m弱以上のもので丘陵上にあつて群集墳に取り込まれる30mを越えないものに区分した。その上で、前者の大型の8基の前方後円墳を、4世紀中葉に始まり6世紀後半まで継続した本地区を本首とした首長層の墳葬系列と位置づけた。これに対して、後者の小型の4基(本村A1号墳、谷上B1号墳、女原C14号墳、飯氏B14号墳)は6世紀中葉以降に造営され始める群集墳の盟主的古墳と位置づけ、この時期に新たに登場した階層的古墳とした。時期的変遷については、4世紀中頃前後から山ノ鼻1号墳→若八幡宮→論崎・丸隈山・山ノ鼻2号墳→今宿大塚(下谷)→飯氏二塚という系譜が想定されている。これらの想定の大枠は現在も変わるものではないが、その後、未調査だった古墳の調査も行われ、資料も増加してきた。ここでは整理の意味で概要を記述しておく。

①山ノ鼻1号墳(西区大字徳永字ヤマノハナ、1990年、福岡市教育委員会調査)

現況 標高約21mの丘陵上に立地する。顕彰碑や果樹園造成によって削平が著しい。

墳丘 前方部を北側に配置。前方部2段、後円部3段に築成。葺石あり。墳輪はない。全長約50m、後円部径22~23mと復元される。

埋葬主体 後円部の削平によって主体部は不明。赤色顔料を塗布した削石が出土しており、堅穴式石室と考えらる。主体部に関連するものか、2枚の板石を立てた遺構が検出されている。

出土遺物 墳頂の掘乱から半円形帯鏡片1、後円部斜面で鼓形器台等の土師器。

時期、その他 時期は出土土師器などから4世紀中頃に位置づけられている。1995年度、市指定史跡となり、今後整備される予定。整備にあたって追加調査も必要か。

②山ノ鼻2号墳(西区大字徳永字ヤマノハナ、1991年、福岡市教育委員会調査)

現況 標高約10mの低丘陵上に立地する。畑造成のため、墳丘のほとんどが削平されている。

墳丘 前方部を北側に配置。調査では葺石、墳輪は確認されていない。調査で確認した地山成形の墳裾から、前方部が壙形に開き、全長約75m、後円部径51mという復元案が出されている。

埋葬主体 不明。

出土遺物 なし。

時期、その他 従来、丸隈山と今宿大塚の間に位置づけられていたが、調査の結果、墳丘形等から1号墳に近い時期とする意見がある。墳丘形を含めて、今後も検討が必要か。

③若八幡宮古墳(西区大字徳永字下引地、1970年、福岡県教育委員会調査)

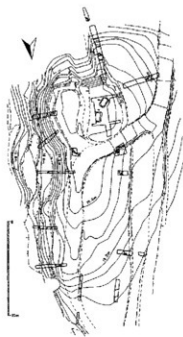
現況 標高約29mの丘陵上に立地する。前方部の先端は削平され、後円部には押版がある。

墳丘 前方部を北側に配置する。前方部2段、後円部3段に築成。葺石あり。墳輪はない。全長47~48m、後円部径25.4mと復元される。

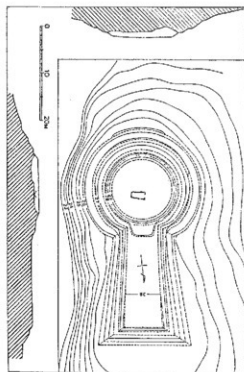
埋葬主体 後円部に舟形木棺、直葬。内法長2.53m、幅0.7~1.05m。頭位N-78°-W

出土遺物 三角縁二神二鬚鏡1、碧玉管玉14、ガラス小玉2、堅刻板革織短甲1、二葉環頭大刀2、鉄剣1、鉄刀子1、鉄鏃19、鉄鉈1、鉄斧1(主体部)、銅製有孔円盤1(土壇状遺構)、土師器(墳丘)

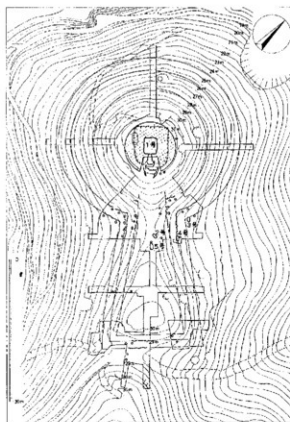
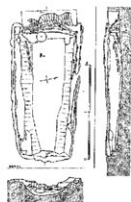
時期、その他 4世紀後半に位置づけられる。



山ノ鼻1号墳



若八幡宮古墳



鐘崎古墳

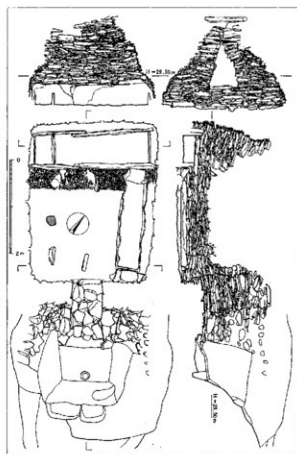


Fig.2 今福平野の前方後円墳1 (1/800、1/80)(実測図は各報告書より転載)

④ 鋤崎古墳 (西区今宿青木字鋤崎、1981～1983年、福岡市教育委員会調査)

現況 標高31mの丘陵先端に立地。

墳丘 前方部を南東方向に配置。前方部2段、後円部3段に築成。葺石あり。墳裾、I、II段目のテラス、墳頂に埴輪。全長62m、後円部径36～38mを測る。

埋葬主体 後円部に横穴式石室。墳丘主軸に沿う。天井石は崩落していたが、閉塞部は完存。壁石、袖石は割石積み。閉塞石は一枚石。埋葬3回。玄室長3.4m、奥幅2.7m、前幅2.5m。短い羨道部にハの字形の前庭部。玄室に3基の棺。前方部とくびれ部に埴輪棺3、石棺1

出土遺物 剣2、銅鏡2、櫛1、勾玉、管玉、ガラス玉、滑石製白玉、四獣鏡、珠文鏡、直刀2、藤手刀子2、鉾1、針3、刀子、鈍、素環頭大刀ほか(1号棺)、板文鏡、素環頭大刀、直刀鈍、鉄斧、刀子、内行花文鏡(2号棺)、直刀、刀子、鉾、四獣鏡、長方板革綴短甲、鉄斧鎌(3号棺)、位至三公鏡(羨道部)、埴輪(円筒、朝顔、家、盾、鞆)、土師器(埴丘)

時期、その他 石室の遺物、埴輪、土師器等から4世紀末～5世紀に位置づけられている。

⑤ 丸隈山古墳 (西区周船寺、1969年、1985年、福岡市教育委員会調査)

現況 標高約23mの丘陵先端に立地。後円部の一部と埴丘裾は削平をうける。

墳丘 前方部を北側に配置。前方部2段、後円部3段に築成。葺石あり。1段目のテラスに埴輪列を確認。全長84.6m、後円部径59.4mを測る。

埋葬主体 後円部に横穴式石室。墳丘主軸に沿う。壁石は割石積み。玄門部分は江戸時代に開口し、昭和初期に修復される。袖石は板石と推定される。玄室長約4m、奥幅2.5m、前幅2.38m。玄室に2基の石棺。

出土遺物 倣製二神二獣鏡1、倣製六獣鏡1、巴形銅器2?、勾玉2、管玉7、小玉71、刀2、剣1、鎌7(石室)、埴輪(円筒、朝顔、盾、水鳥)、土師器(埴丘)

時期、その他 時期は5世紀前半から中頃に位置づけられている。昭和3年、国史跡に指定。

⑥ 兜塚古墳 (西区飯氏字マツヲ、1995年、福岡市教育委員会調査)

現況 標高約41mの丘陵上に立地。前方部の先端は削平をうける。

墳丘 前方部を南東側に配置。前方部1段、後円部2段に築成。葺石あり(後円部)。埴輪あり(樹立したものは確認されていない)。全長53m以上、後円部径43mを測る。

埋葬主体 横穴式石室。墳丘の主軸に沿う。玄門は開口している。天井石は架構している。前庭部の一方の側壁は破壊。壁石、袖石は塊石積み。玄室長4.4m、奥幅2.4m、前幅2.2m。

出土遺物 管玉1、ガラス小玉6、鉄鎌8、鉾1、刀、鎌、飾金具、甲冑?(玄室)、埴輪(円筒、朝顔)、須恵器(埴丘)

時期、その他 出土遺物から5世紀後半から末に位置づけられている。従来、円墳と考えられていたが、前方部の盛土が確認され、丸隈山古墳に続く前方後円墳であることが分かった。

⑦ 今宿大塚古墳 (西区今宿大塚、1977年、福岡市教育委員会調査)

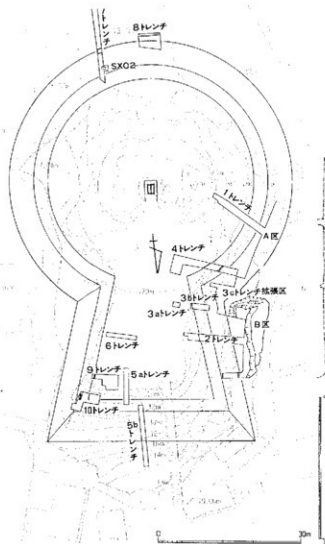
現況 標高約17mの丘陵先端に立地。前方部端は削平。

墳丘 前方部を西側に配置。盾形の周濠が二重巡る。前方部2段、後円部2段に築成。葺石あり(I段目斜面のみ)。埴輪あり(I段目テラス、外堤、外濠縁。樹立したものは未確認)。全長64m以上、後円部径30m、周濠外縁長約100mを測る。

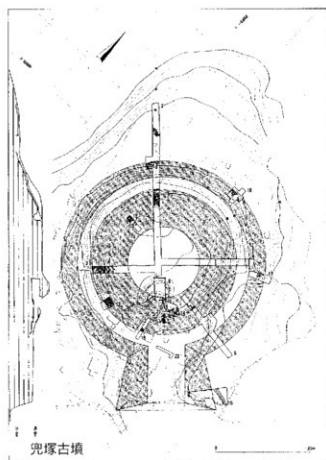
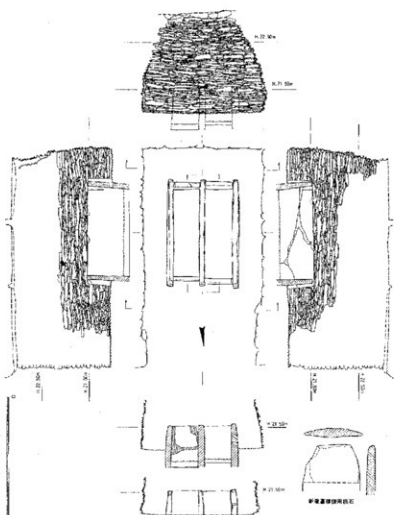
埋葬主体 横穴式石室。未調査。

出土遺物 埴輪(円筒、武人、馬ほか)、須恵器、陶質土器(埴丘)

時期、その他 出土遺物から6世紀初頭から前半に位置づけられている。昭和42年、国指定史跡。



丸隈山古墳



兜塚古墳

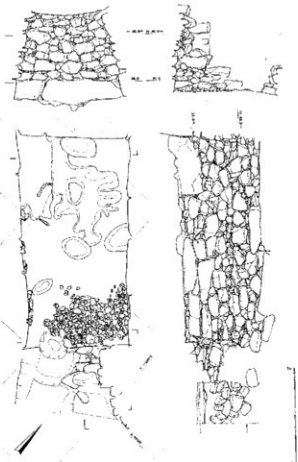
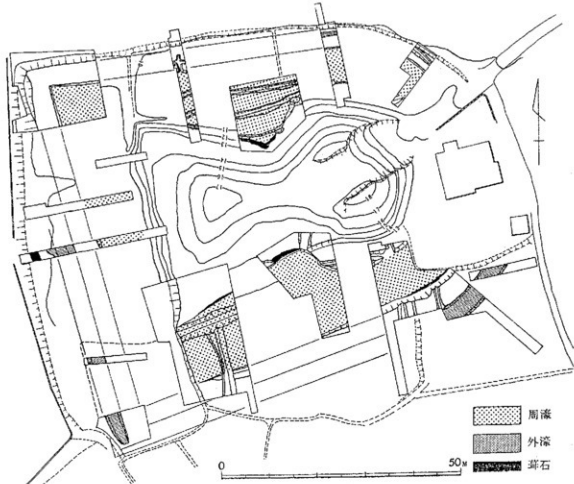
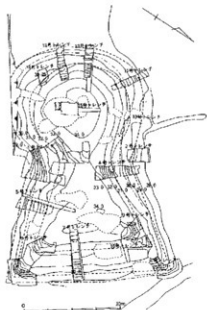
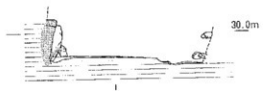


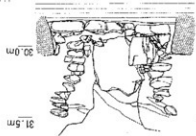
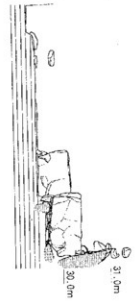
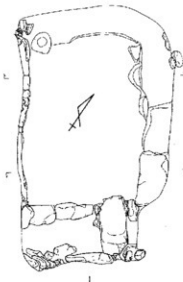
Fig.3 今宿平野の前方後円墳2 (1/800、1/80) (実測図は各報告書より転載)



今宿大塚古墳



飯氏二塚古墳



0 3m

Fig.4 今宿平野の前方後円墳3 (1/800、1/80) (実測図は各報告書より転載)

⑧下谷古墳（西区徳永）

若八幡宮古墳の南側に位置する。昭和40年代に墳丘が削平された。航空写真によると、50mほどの前方後円墳であったことが伺える。削平後の踏査で、大型の石材が確認されており、主体部は横穴式石室と推測されている。6世紀前半頃に位置づける説がある。

⑨飯氏二塚古墳（西区飯氏字鏡原、1993年、福岡市教育委員会調査）

現況 標高約34mの丘陵上に立地する。

墳丘 前方部を北東側に配置。前方部2段、後円部2段に築成。葺石あり。墳輪なし。全長48m、後円部径mを測る。

埋葬主体 横穴式石室。古墳主軸に直行。南東側に開口。天井石、壁石の大半は抜き取られている。袖石は大きめの塊石を仕切り石に積む。閉塞石は1枚石。玄室長約3.5m、幅約2.3m

出土遺物 馬具（雲珠辻金具）、ガラス小玉42（玄室）、須恵器（くびれ部）

時期、その他 出土遺物から6世紀初頭から前半に位置づけられている。墳丘は今宿大塚古墳の3/4の相似形である。

参考文献

- 1) 藤沢一男『丸瀬田古墳Ⅰ』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第146集』福岡市教育委員会1986
- 2) 福岡市教育委員会『今宿・今宿遺跡』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集』1981
- 3) 福岡市教育委員会『今宿遺跡』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第389集』1994
- 4) 福岡市教育委員会『今宿五郎江遺跡』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集』1986
- 5) 福岡市教育委員会『今宿五郎江遺跡Ⅱ』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集』1991
- 6) 福岡市教育委員会『志木遺跡』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第169集』1987
- 7) 福岡市教育委員会『徳嶋遺跡Ⅰ』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第388集』1994
- 8) 福岡市教育委員会『大塚遺跡・衣原遺跡』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第224集』1990
- 9) 福岡市教育委員会『今宿高田遺跡』『今宿ハイパス関係埋蔵文化財調査報告書第10集』1994
- 10) 福岡市教育委員会『徳永遺跡Ⅱ』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第306集』1991
- 11) 福岡市教育委員会『徳永ラタ古墳群』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第56集』1980
- 12) 徳永古墳群調査会『徳永古墳群』1985
- 13) 福岡市教育委員会『徳永古墳群3 女塚上ノ谷岡段址』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第436集』1995
- 14) 福岡市教育委員会『今宿小塚遺跡』『今宿ハイパス関係埋蔵文化財調査報告書第5集』1977
- 15) 小田富士雄『福岡県史』『福岡県史』西日本新聞社1982
- 16) 福岡県教育委員会『今宿古墳群』『福岡県文化財報告書第38集』1967
- 17) 福岡市教育委員会『松原古墳群』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第28集』1974
- 18) 福岡市教育委員会『松原古墳群2』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第351集』1993
- 19) 福岡市教育委員会『北ノ鼻1号墳』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第309集』1992
- 20) 福岡市教育委員会『北ノ鼻2号墳』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第353集』1993
- 21) 福岡県教育委員会『若八幡宮古墳』『今宿ハイパス関係埋蔵文化財調査報告書第2集』1971
- 22) 福岡市教育委員会『徳嶋古墳』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集』1984
- 23) 福岡市教育委員会『丸瀬田古墳Ⅱ』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第146集』1986
- 24) 福岡市教育委員会『兜塚古墳』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第474集』1996
- 25) 藤沢一男『今宿人塚』『福岡平野の歴史・歴史発掘された遺跡と遺物・原始時代～江戸時代』1977
- 26) 福岡市教育委員会『飯氏二塚古墳』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第435集』1995

第3章 調査の記録

1. 立地

谷上B1号墳は主体部に横穴式石室をもつ前方後円墳である。高祖山から北側に派生する丘陵上に立地する。この丘陵は先端でヤツテ状に分かれ、間には狭い谷が入り込む。丘陵の北側には扇状地の平野と砂丘の後背湿地が広がる。平野にせり出した丘陵の最先端には大型の前方後円墳が、丘陵上には小型の群集墳が築造される。本古墳の立地は前者の前方後円墳と異なり、群集墳に含まれる様相を示している。本墳の周辺には谷上A～C古墳群、相原A～C古墳群が分布し、それらの古墳群に囲まれる位置にある。現況は山林で、標高73～78m、花崗岩の風化土の基盤に築造される。古墳へは九電の鉄塔工事用の林道で向かうことになる。途中、山城の青木城跡があり、堀切りが見られる。

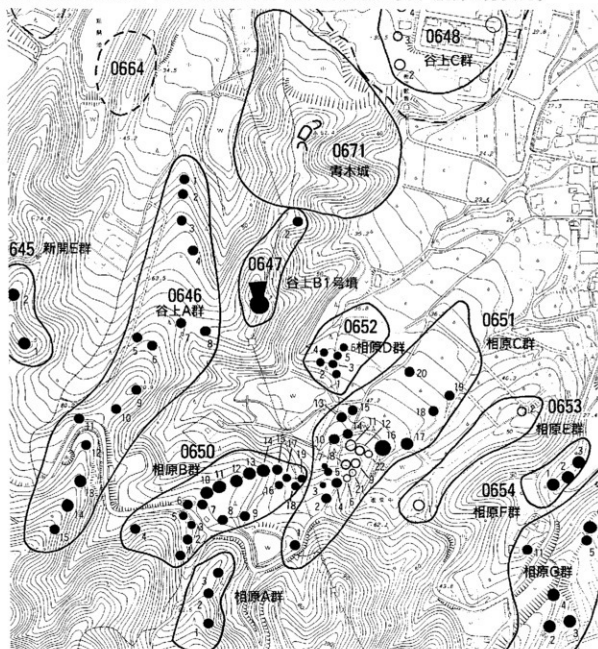


Fig.5 谷上B1号墳位置図 (1/2500)

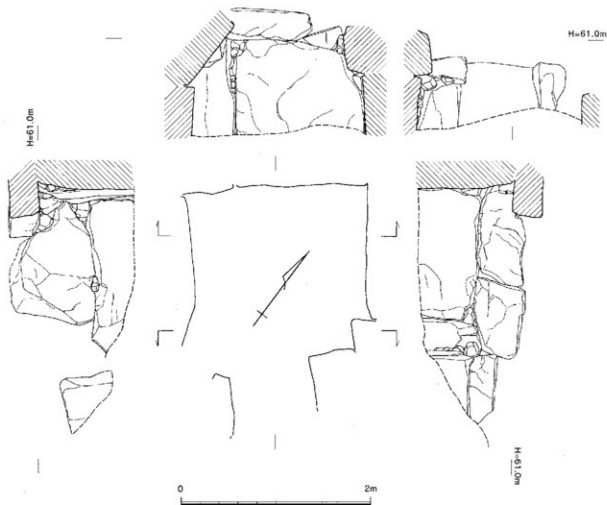


Fig.6 谷上B2号墳石室実測図 (1/40)

2.調査の経過

調査は平成8年1月9日から2月29日にかけて行った。調査地点は山林で、樹が植林されていた。調査にあたって、測量等に支障を及ぼす雑木や樹の枝等について必要最小限の伐採を行った。伐採後、国土座標に基づいた基準点を設定し、墳丘の測量を行った。併せて、墳丘規模の把握のため、前方部、後円部、くびれ部にトレンチを設定した。石室は天井石が崩落していた内部の土砂等を掘り出し、石室の実測を行った。また、前庭部にトレンチを設定し、構造、追葬の有無等を確認した。調査後は各トレンチは埋め戻し、石室は床面を土糞で覆った。

谷上B2号墳 (Fig.6) 谷上古墳群B群は現在2基が確認されている。2号墳は1号墳から北に80mの所に位置する。1号墳の調査に併せて、石室の清掃と現況の実測を行った。古墳は北側に延びる丘陵の東側斜面に立地する。標高61.5mを測る。墳丘の遺存状況は良くないが、径約10mの円墳と考えられる。石室は両袖型の横穴式石室である。主軸方位はN-36°-Wで南側に開口する。玄室のプランは正方形で、玄室の各壁の長さ約1.8mを測る。天井石及び壁の石は抜き取られ、腰石が残るのみである。石室の石材は花崗岩が使用される。玄門は左側(南側)は壊れている。玄門の幅は80cmと推測できる。羨道部の状況は不明である。石室形態から6世紀後半頃に位置づけられるものと考えられる。

3. 墳丘

墳丘には樹木があったため、トレンチ設定に制約があったが、墳丘の調査は炭椁の確認を主目的に前方部3ヶ所(2、5、6トレンチ)、後円部2ヶ所(1、3トレンチ)、くびれ部1ヶ所(4トレンチ)の計6ヶ所にトレンチを設定して行った。(Fig.7~9)

遺存状況 古墳は北側に延びる丘陵尾根に沿って築造され、前方部を尾根先端に、後円部を尾根上方に配置する。古墳の両側面は急な斜面である。前方部の北側は長さ13mの平坦部が延びて急斜面となる。現況は墳丘に楕が植えられており、各所に山芋を掘った穴が残っている。また、西側の裾部に狭い林道が設けられている。しかし、大きな削平もなく、遺存状況は良好である。墳丘表面には竊食土と流出した盛土が堆積している。墳丘の現存長約37m、幅(後円部)約20m、後円部の頂部で標高78.2mを測る。主軸方位はN-7°-Eをとる。

墳丘構造 墳丘は段築、葺石は見られない。また、墳輪の樹立も認められない。墳丘は丘陵に沿って、後円部から前方部へ下降しており、両墳端のレベル差は約3mある。

墳丘は大半が盛上である。盛上は主に地山の花崗岩の風化土が用いられ、大別して、1.淡褐色粘質土、2.淡黄灰色粘質土、2'.淡黄灰色粘質土と黒色粘質土(5cm程の厚さの黒色粘質土の上に10cm程の厚さの淡黄灰色粘質土が重なる)、3.黒色粘質土からなる。盛土には縄文土器や石鏃等が含まれており、築造以前にはこの地に当該期の遺構があったことが推測できる。

前方部前面の墳裾は地山を幅3m、深さ1.6mほど斜めに削り出す。墳裾より北側は緩やかに傾斜する平坦面となる。この平坦面も墳裾の削り出しの際に整形されたものと考えられる。墳裾の標高は約72mを測る。前方部側面も地山の整形は行われているが、墳裾には明瞭な平坦面は見られない。盛土は2トレンチの土層の観察から以下のような構築過程が想定できる。

- ① 基底部は旧表土の上に厚さ20cmの淡褐色粘質土を盛り、平坦面を造る。この平坦面を基底面にして墳丘の盛上は行われる。基底部の盛土は均質でしまりがある。旧表土の標高73.3mを測る。
- ② 基底面の上に前方部前面が高くなるよう土手状に約40~50cmの厚さで盛土を行う。土留めの為であろう。盛土は淡黄灰色粘質土と黒色粘質土との互層である。
- ③ ②から上は厚さ10~20cmの淡褐色粘質土がほぼ水平に盛られていく。小ブロックまじりであるが、堅く閉まっている。所々に淡黄灰色粘質土の間層が見られる。
- ④ ③の盛土は厚さ約1mほど続した後、再び、②で見られた土手状の盛土を行い、頂部まで積み重ねる。盛上の高さ2.4m、頂部の標高75.8mを測る。

前方部のコーナーは側面の墳裾が不明瞭であるが、ほぼ直角である。前面の墳裾の幅13.0m、墳頂部の幅4.0mを測る。

くびれ部は4トレンチで確認したが、あまり明確ではない。墳裾で標高73.3mを測る。くびれ部の幅は約11.5mと復元でき、くびれ部から前方部にかけてほとんど開かないことが分かる。

後円部南側は馬蹄形に丘尾切断を行い、地山を幅約8m、高さ約1m削り出して墳裾を整形する。墳裾は後円部西側は平坦面があるため、明瞭であるが、東側はそのまま斜面に続くので不明瞭である。なお、後円部の南側に見られる高まりはこの地山整形によるものである。後円部南側の墳裾は標高75.0mを測る。後円部の盛上は1、3トレンチの上層の観察から、地山の直上に厚さ20~30cmの淡褐色粘質土が見られる。墓道や石室はこの層を掘り込んで造られており、後円部も前方部同様、地山整形後に盛上を行い、基底部を形成しているものと考えられる。したがって、石室の構築、後円部の盛土はこの基底部形成後に行われたと考えられる。後円部の地山整形面の標高75.2m、盛土は高さ3.0m

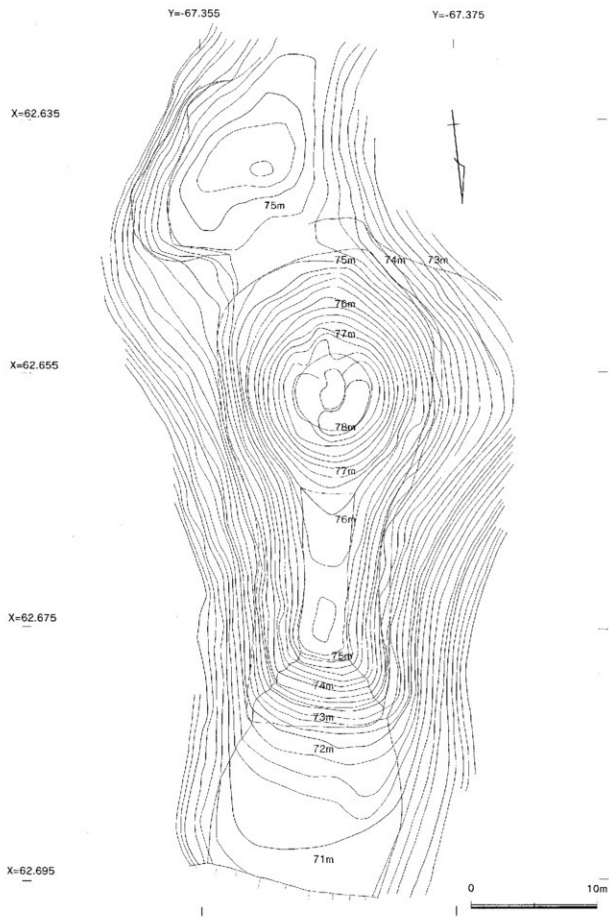


Fig.7 谷上B1号墳現況測量圖 (1/300)

Y=67.355

Y=67.375

X=62.635

X=62.655

X=62.675

X=62.695

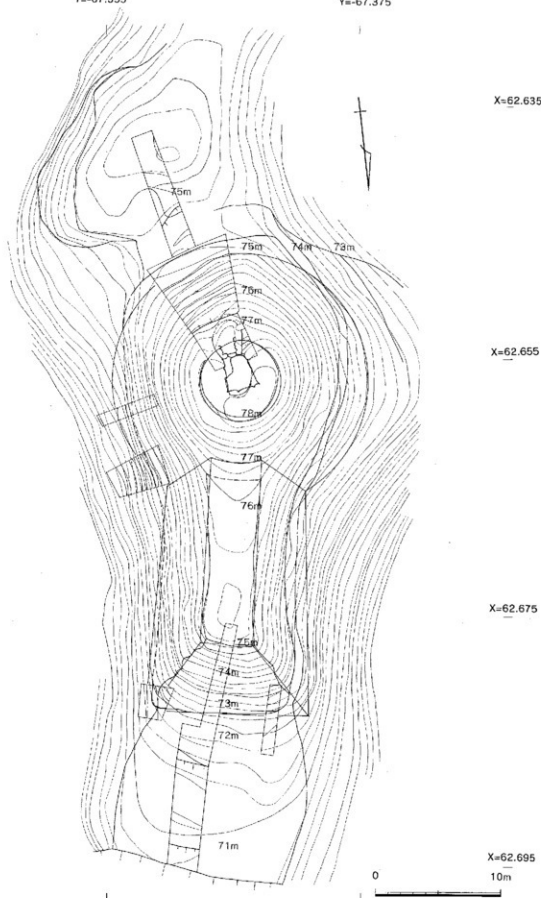


Fig.8 谷上B1号墳トレンチ位置図 (1/300)

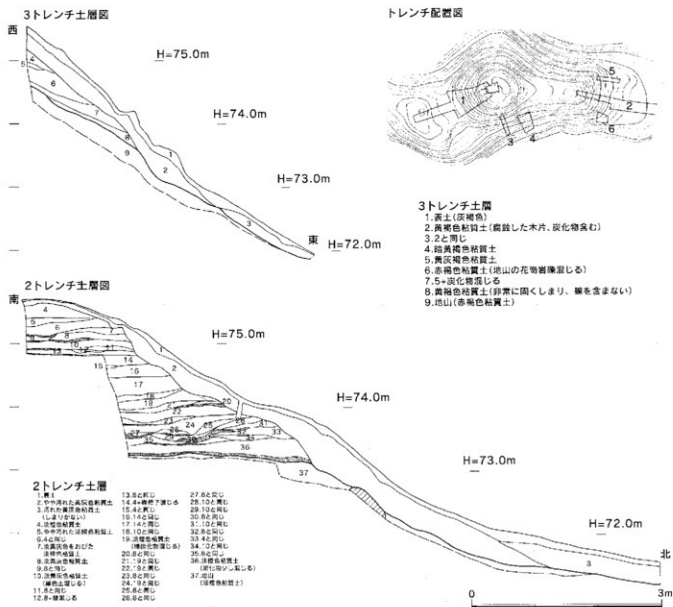


Fig.9 谷上B1号墳丘土層図 (1/60)

を測る。後円部径約20m、墳頂部の標高78.2mを測る。

後円部の南側には地山整形による高まりが見られるが、この場所は石室の開口方向に当たる。そこで、杭壁土坑を1基検出した。土坑は完掘していないが、確認した長さ2.1cm、幅0.6cm、深さ0.4cmを測る。古墳の墓前祭祀に関連する遺構と考えられる。また、後円部南側の墳丘斜面から丘尾切断の溝にかけて破砕された須恵器、土師器が出土した。

墳丘規模 規模は各トレンチで確認した墳裾から、後円部の中心点と墳丘の中軸を求めた。それらをもとに復元した墳丘の規模は以下に示す通りである。

	全長	後円部径	くびれ部幅	前方部長	前方部前端幅	後円部標高	前方部標高
墳裾	37m	20m	11.0m	18m	13.0m	75.0m	71.5m
墳頂部	—	6m	4m	15m	4m	78.2m	75.8m

4. 横穴式石室

本墳の埋葬施設は単室両袖型の横穴式石室である。主軸方位はN-10°-Wで、南側に開口する。開口方向は前方部の向きとほぼ反対方向をとる。石室は既に天井石、壁石の一部が崩落し、床面から40cmほど流土で埋没していた。玄室は短い羽子板形のプランを呈し、ハの字形に開く前庭部が連結する。前庭部の側壁は左右非対称で、左壁の方が開き気味になる。全長4.2mを測る。閉塞部は攪乱はなく、1枚石の閉塞石が立った状態であった。石室の石材は花崗岩の塊石である。(Fig.10、11)

玄室 玄室は短い羽子板形のプランを呈する。奥壁幅2.3m、左壁(西壁)長2.6m、右壁(東壁)長2.4m、袖石側の幅1.6mを測る。天井石は既に抜き取られており、残存しないが、奥壁、側壁の一部は最上部まで遺存している。そのことから石室の天井までの高さは約2.0mと推定できる。各壁の表面には赤色顔料等が塗られていた痕跡は認められなかった。各壁ごとに見ていくと、奥壁には左から幅30cm、高さ40cmと幅140cm、高さ70cm、幅60cm、高さ60cmの3石を立てて腰石とする。腰石より上は40~100cmの石を持ち送りながら横積みしていく。石の大きさはまばらだが、腰石より上に水平方向に3段の石積みの単位が見られる。奥壁と側壁の隅角は腰石から上は互いの石が重なるように積まれている。各壁とも石の隙間には小さな塊石を詰めて安定を図っている。左壁は袖石側が大きく崩落している。また、残存している壁も内側にせり出している。左壁は腰石に幅60~120cmの石を3個立てる。それより上は40~90cmの石を4~6段横積みしていく。右壁は奥壁側が一部崩落しているが、遺存状況は良好である。腰石に幅60~120cmの石を3個立てる。それより上は40~90cmの石を4~6段横積みしていく。

玄門部は両袖で、左(西)側は幅50cm、高さ約90cm、右(東)側は幅50cm、高さ70cmの扁平な板石を立てる。その上に幅40cm程の平石が左側で1段、右側で2段積み、その上に幅100cmの石を架構して楣石としている。袖石の奥壁側の間には幅20cm、長さ70cmの楣石が置かれる。楣石の上には石は残存していないが、天井石の間に高さ約40cm程の石を積んで前壁を構築していたものと推測できる。玄門の幅は下端約60cm、上端幅約40cm、楣石からの高さ約100cmを測る。

床面はかなり攪乱をうけて、敷石が部分的に残るのみである。ただ、敷石や遺物の出土状況から床面は上下2面あったと考えられる。上面の敷石は殆ど原位置を留めていない。下面は約10cmドで検出した。敷石は部分的に残る(Fig.10)。敷石にはこぶし大の花崗岩が用いられる。また、床面の埋土には3~5cm程の大きさの玉砂利が含まれており、木米、敷石の間に玉砂利が詰められていたと考えられる。

前庭部 前庭部の側壁は袖石に取りついて構築される。平面形はハの字形を呈する。壁石は外傾気味に、袖石の高さまで積まれる。左壁長1.2m、右壁長0.7mを測る。壁石には左壁は長さ1m程の平石を用いているが、右壁は20~30cm程のこぶりの塊石を用いる。前庭部の床面はほぼ平坦で、側壁の基底面は楣石の高さに等しい。

前庭部には墓道が取りつく。前庭部及び墓道部分のトレンチの土層観察から、墓道は墳場に向かって緩やかに傾斜していく。初葬時の墓道の長さは5~6mを測る。また、前庭部及び墓道は初葬時の閉塞に伴って埋め戻されたと考えられる。

閉塞施設 閉塞部は攪乱をうけておらず、最終の閉塞時の状態が検出できた。閉塞石は高さ90cm、厚さ20cmの板石を用いる。平面形は台形を呈する。上端幅約40cm、下端幅約90cmを測る。この石を袖石の外側に密着するように立てて、玄門を塞いでいる。その後、板石の前面で粘土と30~100cmの塊石で覆い、前庭部、墓道を埋め戻している。塊石は主に板石を粘土で覆った後に詰められる。

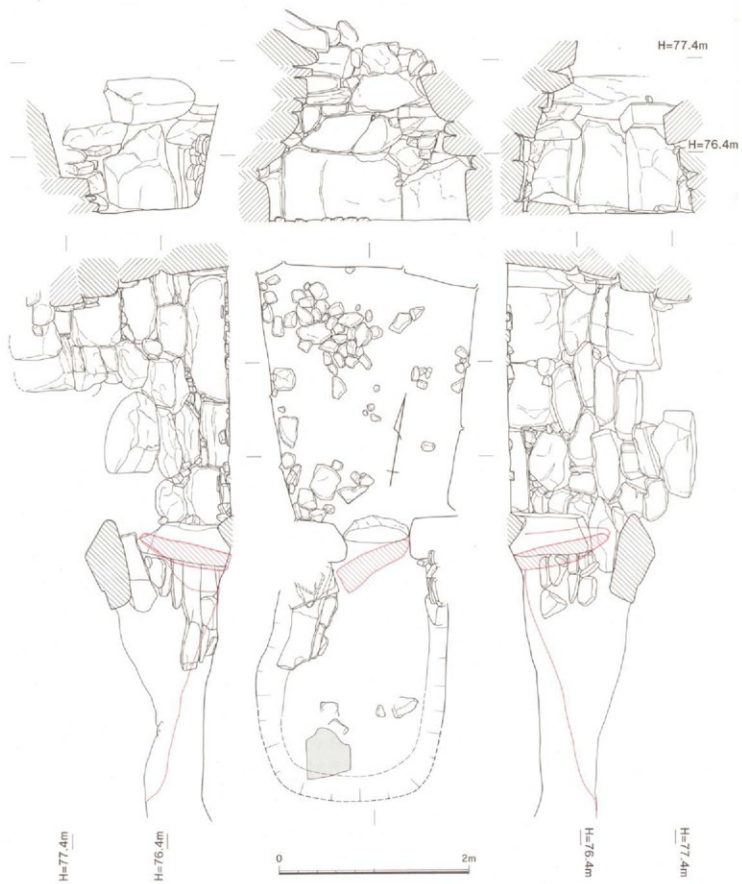


Fig.10 谷上B1号墳石室実測圖 (1/40)

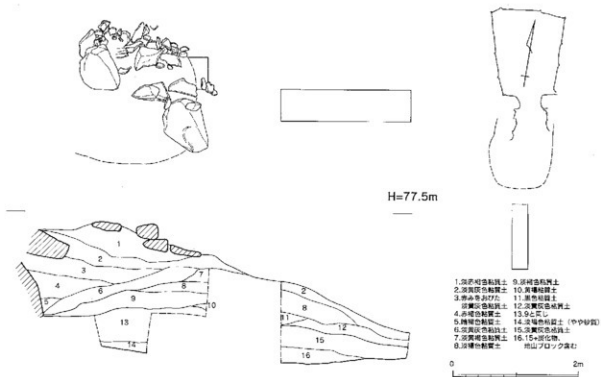


Fig.11 谷上B1号墳閉塞土層実測図 (1/60)

前庭部及び墓道のトレンチの上層観察から閉塞の状況を復元すると、初葬時の閉塞は板石で玄門を塞いだ後に前庭部及び墓道は埋め戻されたと考えられる。追送時は玄門に向かって斜め墓道が掘られている (Fig.10)。玄門までの長さ2.5m、幅1.5mを測る。Fig.11の6層の下阿が追葬時の掘削の面である。6層は淡黄灰色粘質土で、この掘削面に並行するように厚さ20cm程見られる。この層は閉塞を行う前のもので、埋葬もしくは板石を玄門に立てる際に行われた床上げと考えられる。板石で玄門を塞いだ後は粘土と塊石で墓道を埋め戻す。床上げ後の墓道の前面で、径30cm程の範囲で炭を検出した。埋葬に際して火が焚かれた痕跡と考える。

遺物の出土状況 石室内は盗掘のため、遺物はほとんど残っていなかった。僅かに大刀等の鉄器が残っていたが、いずれも原位置を留めるものは無かった。鉄器は奥壁付近に集中していたが、主に上面の敷石の間などから出土した。この他、小片であるが、須恵器片が出土した。本来は須恵器も副葬されていたものと考えられる。石室からの出土遺物は以下の通りである。

容器

須恵器

武器

大刀 2

鉄鉾 15 + α

馬具

轡 1

絞具 1

鍍金具1

装身具

管玉 1

5. 出土遺物

今回の調査では遺物は主に石室と後円部の墳丘斜面から出土した。ここに掲載した遺物のうち、須恵器と石織は後円部墳丘斜面で、鉄器と管玉は石室から出土したものである。

須恵器 (Fig.12)

坏蓋 (1) 1は天井部は丸みを帯び、口縁と天井部の境は不明瞭である。口縁端部は沈線状の段をもつ。天井部の1/2に回転ヘラケズリを施す。器高4.9cm、口径14.6cmを測る。

坏身 (2~4) 口縁は内傾して立ち上がり、端部は丸く仕上げられる。2、4は底部の1/2に、3は1/3に回転ヘラケズリを施す。器高4.9cm、4.2cm、4.6cm、口径12.3cm、12.0cm、12.3cmを測る。

高坏 (5~8) 5は無蓋の高坏である。脚部は欠損しているが、3方に透かしが施される。口縁は緩やかに外反し、体部下半には2条の凸線が走る。凸線の間には櫛描き波状文が施される。口径9.8cmを測る。6は無蓋の高坏である。口縁は緩やかに外反し、端部は丸く仕上げられる。口縁と体部の境には稜をもつ。脚部には3方透かしが施される。口径12.0cmを測る。7は坏部の下半である。脚部は欠損している。8は脚である。体部はハの字形に開き、透かしが施される。端部は玉縁状に仕上げる。底径10.6cmを測る。

壺 (9) 9は短頸壺の底部と考えられる。底部には回転ヘラケズリが施される。

器台 (10~13) 10~12は同一個体と考えられる。口縁端部内面は肥厚し、外面には突帯が走る。口縁下の1条の浅い凹線と体部の2条の鈍い凸線の間が文様帯となり、櫛描き波状文が施される。坏部下半には平行帯が施され、内面には同心円文が残る。脚部は2条の浅い凹線で、文様帯を区画する。文様帯には櫛描き波状文が施され、三角形の透かしが、千鳥状に配置される。坏部と脚部の境には突帯が走る。13は脚部で、凹線が区画される文様帯には櫛描き波状文が施される。透かしは千鳥状に配置される。

土師器 (Fig.12)

高坏 (14、15) 14は須恵器の高坏を模倣した土師器である。口縁は緩やかに外反し、体部下半に1条の凹線が走る。脚部は欠損している。色調は淡橙色を呈する。胎土は微砂を少し含む。15は脚部で筒状を呈する。

坏 (16) 口縁は欠損している。底部はヘラ切りである。底径7.0cmを測る。

甕 (17) 口縁は欠損している。調整は外面は縦方向のハケメを施す。

武器、馬具、装身具、その他 (Fig.13)

鉄織 (18~32) 今回出土した鉄織には完形品はない。18、19は菱形で両丸造の身をもつ。身幅1.0cm、1.0cmを測る。20~30は織身は欠損している。断面方形の篋被部である。幅0.6~0.8cmを測る。31、32は断面円形の莖部で木質痕が残る。

大刀 (33、34) 33は切先と莖部を欠いている。残存長56.4cm、身幅3.2cmを測る。34は切先を欠いている。表面に木質痕、莖部に目釘孔がある。残存長71.8cm、莖部長17.0cm、身幅4.6cmを測る。

轡 (35、36) 35は環状鏡板付轡である。環状の鏡板の一部と馬銜が残存する。馬銜は組み合わせ式である。36は引手壺の円環の部分である。

絞具 (37) 基部を欠いているが、絞具と考えられる。

鞍金具 (38) 幅1.4cmの延鉄に鉄を打ち込んだものである。ややカーブしている。鉄2本残存。

管玉 (39) 碧玉製の管玉である。長さ0.9cm、径0.4cmを測る。

石織 (40) 黒曜石剥片織で、先端、基部を欠く。長さ1.7cm、幅0.9cm、厚さ0.2cmを測る。

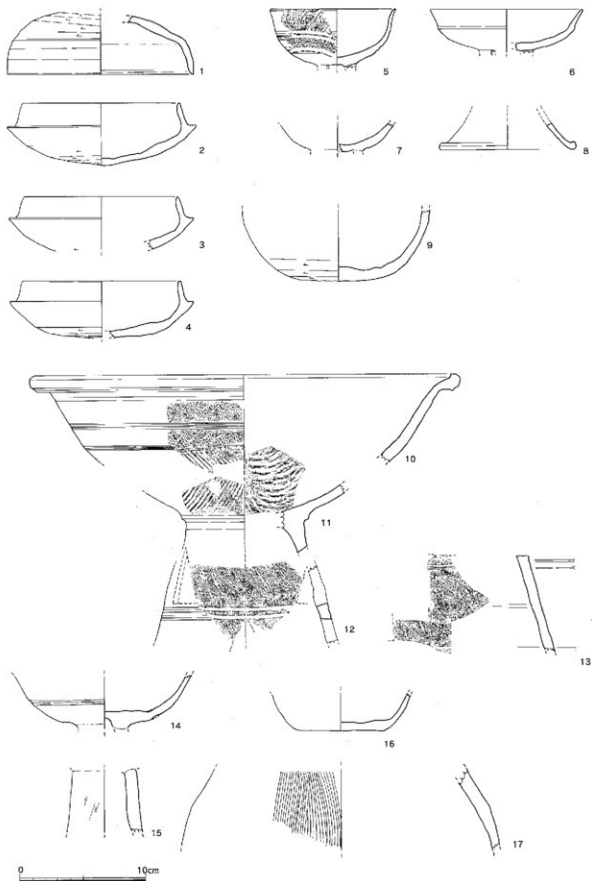


Fig.12 谷上B1号墳出土遺物実測図1 (1/3)

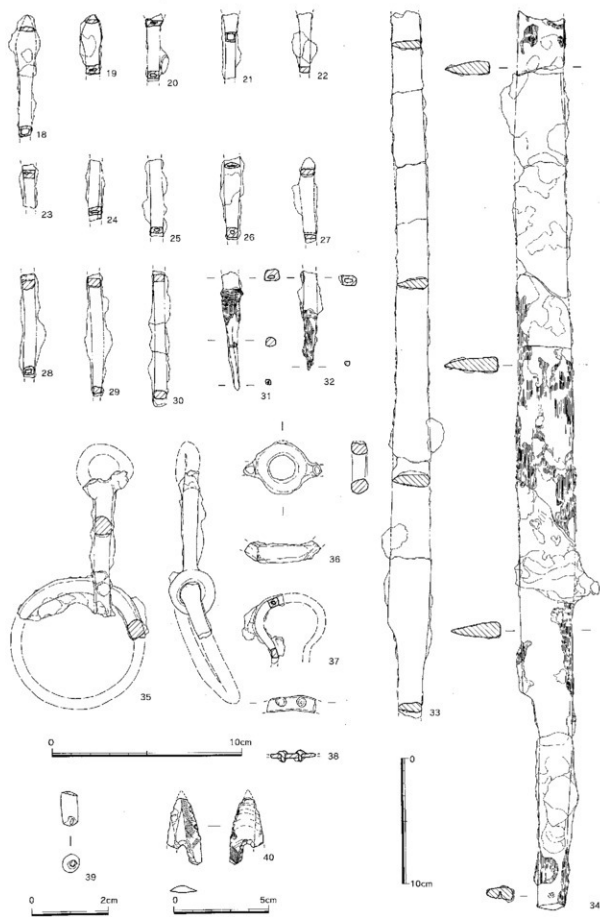


Fig.13 谷上B1号墳出土遺物火洲区2 (1/1、1/2、1/3)

6.まとめ

今回の調査で谷上B1号墳の規模、内部主体の構造等を把握することが出来た。ここではそれらの調査成果を記述してまとめとしたい。

1) 墳丘について

立地 古墳は北側に延びる丘陵尾根に沿って築造され、前方部を尾根先端に、後円部を尾根上方に配置する。今宿平野の大型の前方後円墳が標高約40mより低い丘陵の先端に立地するのに対して、標高約72~78mを測る丘陵部の中程に立地する。

墳丘規模 墳丘の全長約37m、後円部約20mを測る。主軸方位はN-7°-Eをとる。墳丘は段築、葺石は見られない。また、埴輪の樹立も認められない。墳丘は丘陵に沿って、後円部から前方部へ下降しており、両墳端のレベル差は約3mある。前方部前面は高さ1.6mほどの削り出しと約2.5mの盛土が行われ、見かけの高さは約4.1mを測る。墳裾より北側は地山成形による緩斜面となる。後円部南側は馬蹄形に丘尾切断を行い、地山を高さ約1m削り出して墳裾を整形する。その上に約3.0mの盛土が行われ、前面の見かけの高さは約4.0mを測る。後円部の南側には地山整形による高まりが見られるが、この場所は石室の開口方向に当たる。そこで、焼壁土坑を1基検出した。時期は明確ではないが、古墳に係わる遺構と考えられる。

墳丘形 各トレンチで確認した墳裾から、墳丘の主軸を求めた。後円部の中心は墳丘の中軸と石室の中軸の交点である。それらをもとに復元した墳丘形は以下に示す通りである。前方部幅13m、くびれ部幅11mで、前方部があまり広かからない平面形を呈する。

2) 石室について

方位 本墳の埋葬施設は単室両袖型の横穴式石室である。主軸方位はN-10°-Wで、南側に開口する。開口方向は前方部の向きとほぼ反対方向をとる。このような例は福岡市神松寺古墳、那珂川町中原1群1号墳、筑紫野市剣塚1号墳等に見られる。前方後円墳の開口方向は前方部方向からくびれ部方向、更に主軸に直行する方向に時期的に変化していくが、その意味では新しい様相と言えよう。ただ、本墳の場合は古墳の立地が狭長な丘陵上という地形的制約も影響しているものと考えられる。

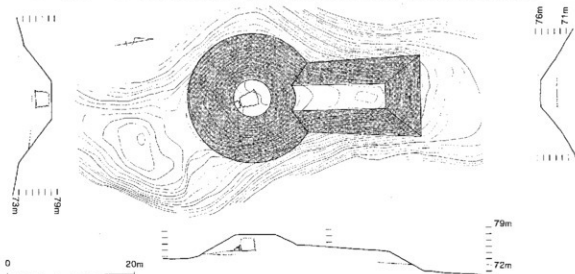


Fig. 14 谷上B1号墳墳丘復元図 (1/600)

平面形 石室は羨道部をもたず、玄室は短かい羽子板形のプランを呈し、ハの字形に開く前庭部が連結する。各壁の構築には腰石を用いて、その上に塊石を横積みする。また、袖石の上には榎石を架けて前壁を構築する。袖石は高さ70~90cmの立石と1~2個の塊石で構成される。袖石の間に榎石が置かれるが、玄室と前庭部の間で段差はつかない。奥壁から前庭部までの長さ4.2 mを測る。玄室の奥壁幅2.3 m、左壁（西壁）長2.6 m、右壁（東壁）長2.4 m、袖石側の幅1.6 mを測る。天井石は残存しないが、奥壁、側壁の状態から天井までの高さは約2.0 mと推定できる。平面企画で見ると、玄室比（長さ/奥壁幅）は1.1、晋尺系尺（約25cm）で10尺に近い数字が求められる。

前庭部、閉塞 前庭部の側壁は左右非対称で、左壁が開き気味になる。前底部の側壁は袖石に取りついて、外傾気味に袖石の高さまで積まれる。左壁長1.2 m、右壁長0.7 mを測る。初葬時の墓道は約5~6 mを測る。閉塞部は最終埋葬時の状態で遺存していた。その土層観察から1回の追葬があったと考えられる。追葬の際の墓道は幅1.5 m、長さ2.5 mで、斜めに掘りこまれている。閉塞石は高さ90cmの板石を用いる。この石を袖石の外側に密着するように立てて、玄門を塞いでいる。その後、板石の前面を粘土と塊石で覆い、前庭部、墓道を埋め戻している。追葬時の墓道の前面で炭化物のまとまりを検出した。幕前祭祀に係わるものと考えられる。

石室の形態、規模で類例を求めると、那珂川町小丸1号墳、カクチガ浦2号墳、佐賀市六本黒木ST042号等がある。いずれも6世紀前半から中頃に位置づけられる。小丸1号墳は全長約25mの前方後円墳で、石室は全長3.7 m、玄室長2.7 m、奥壁幅2.4 m、袖石側の幅1.7 mで、本墳の石室に近似する。これらの石室は北部九州型石室の系譜を引き、発展したもので、形態的には羨道で羽子板形を呈することや前壁を構築すること、前庭部から玄室に至る段は無く、榎石を配すること等が挙げられる。前方後円墳だけでなく、円墳にも採用されている。

出土遺物 石室内は攪乱が著しく、原位置を保つものは少ない。石室の出土遺物は須惠器片、大刀、鉄鏃、馬具（轡、鍍金具）、管玉等がある。後円部墳丘から須惠器環、高杯、器台が出土した。

3) 古墳の位置づけについて

墳丘上上の須惠器を見ると、坯身、蓋等は口径の大型化や体部の不明瞭な段の特徴等から、小田縄年III A期（陶器TK10）に位置づけられるものと考えられる。しかし、高杯や器台に古い様相が見られ、II期まで遡る可能性があり、古墳の時期としては6世紀前半（初葬）から中頃（追葬）に位置づけられるものとする。現在、今宿平野の大型前方後円墳（50m崩以上）は飯氏二塚古墳が最後と考えられる。本墳は時間的には飯氏二塚古墳に後続する時期と言えるが、両者の古墳の立地、墳丘の規模、構造（麻域の変化、小型化、葺石や段築が無い等）を比べると、首長墳としての前方後円墳の衰退、性格の変化が伺える。一方、周囲の群集墳（徳永H群6、7、26号墳、相原C群8、9号墳、鋤崎A群3号墳等）は本墳の築造の時期に造営を開始し始める。ここで見られる前方後円墳の衰退、群集墳の造営については従来言われてきたように、伝統的首長層の衰退とそれに変わる新興勢力の台頭、新たな支配関係の構築という流れで捉えられるだろう。しかし、それを更に深めるには、各古墳群ごとの細かい変遷や相互の関連の分析が一層必要になるだろう。古墳の位置づけとしては不十分なものがあるが、今後の課題としたい。

最後になったが、調査の担当者の一人である白井克也氏は平成8年9月付で、東京国立博物館に赴任することになった。この場をかりて、今後の健康と活躍を願って終わりとしたい。

第4章 新開窯跡群採集資料の紹介

1.はじめに

新開窯跡群は福岡市西区今宿に所在する須恵器の窯跡である。高祖山から派生する標高50~60mの丘陵上に立地する。周囲には新開古墳群が分布する。1971年、日本考古学協会生産技術特別委員会窯業部会の事業として、小田富上雄氏らによって発掘調査が行われた。その調査で2基の窯跡が確認され、坏蓋、有蓋高坏、壺、甕等の器種が出土している。それらの資料は現在整理中で内容は断片的に紹介されたのみであるが、操業の中心は小田編年Ⅰ-B期とされる。また、窯内第一次床面の出土品に定型化以前の特徴をもつ坏、高坏も存在するらしく、操業の上限はⅠ-A期（陶邑Ⅰ-2段階）に遡る可能性があるという¹⁾。1971年以降、窯跡群の発掘調査は行われていないが、1991年、中村勝氏によって灰原の採集資料をもとに分類、編年作業が行われ、Ⅲ期、数十年の操業期間が想定されている²⁾。

2. 遺物

ここで紹介する資料は昭和62年、横山邦雄氏、大橋隆司氏（当時、埋蔵文化財課）によって、採集された灰原の資料である。これらの資料は整理途中で保管されていたが、谷上B1号墳の周辺遺跡の資料として、今回紹介することとなった。量はコンテナ箱で2箱程あり、器種は坏、高坏、甕、器台等がある。資料は細片が多いが、口縁等の形態的特徴が分かるものを図示した。（Fig.15 1~30）

坏蓋（1~14） 坏蓋は天井部はやや丸みを帯び、口縁との境に突出した明瞭な稜をもつ。端部は外側につまみ出すことによって、凹面となるものが多い。10、13は丸く仕上げられる。回転ヘラズリは天井部の約1/2程施す。やや歪んでおり口径には不安があるが、口径は1は9.8cm、2は12.0cm、3は12.6cm、4は11.4cm、5は12.0cm、6は12.8cm、7は12.8cm、8は12.8cm、9は14.6cmを測る。

坏身（15~18） 坏身は口縁は直立気味に立ち上がる。端部は浅い凹面となるもの（15、17~19）と丸く仕上げられるもの（16）がある。凹面となるものは坏蓋の場合と比べ、明瞭ではない。11径は15は8.8cm、16は12.0cm、17は10.3cm、18は14.6cm、19は12.0cmを測る。

高坏（20~23） 高坏は坏部を欠いたものばかりで、すべて短脚である。20は端部を欠いているが、長方形の透かし孔が施される。21は脚端部で、外面に突帯状の段がある。長方形の透かし孔が施される。22は外面に低い段がある。円形の透かし孔が施される。23は坏部の把手と考えられる。

器台（24~28） 器台は全形が伺えるものはない。24~27は坏部の口縁片である。外面に凸線によって文様帯が区分され、その中に櫛歯波状文が施される。24は口縁端部は玉縁状を呈する。28は脚部で、凸線で区分された文様帯には櫛歯波状文が施される。文様の施文の前にカキメを施している。

甕（29~30） 図示したのは2点である。これ以外に胴部片は多くある。調整は外面は平行叩きもしくは格子目叩き、内面は同心円文を残すものである。29は口縁である。端部を上下に肥厚させる。30は端部外面を肥厚させる。生焼けて黄褐色を呈する。

以上が、採集資料である。これらを費纏すると、複数型式に跨がる資料であるが、小田編年Ⅰ-B期（陶邑Ⅰ型式4~5段階）に位置づけられると考える（坏蓋の一部はⅢ期まで下るものか）。

参考文献

1) 小田富上雄 「須恵器文化の形成と日南交渉 - 総説編 - 西日本初期須恵器の成立をめぐる -」 『古文化誌』 第24集 1991

2) 中村勝 「筑紫の古式窯 - 福岡市新田志志跡群とその資料 -」 『福岡考古』 第15号 1991

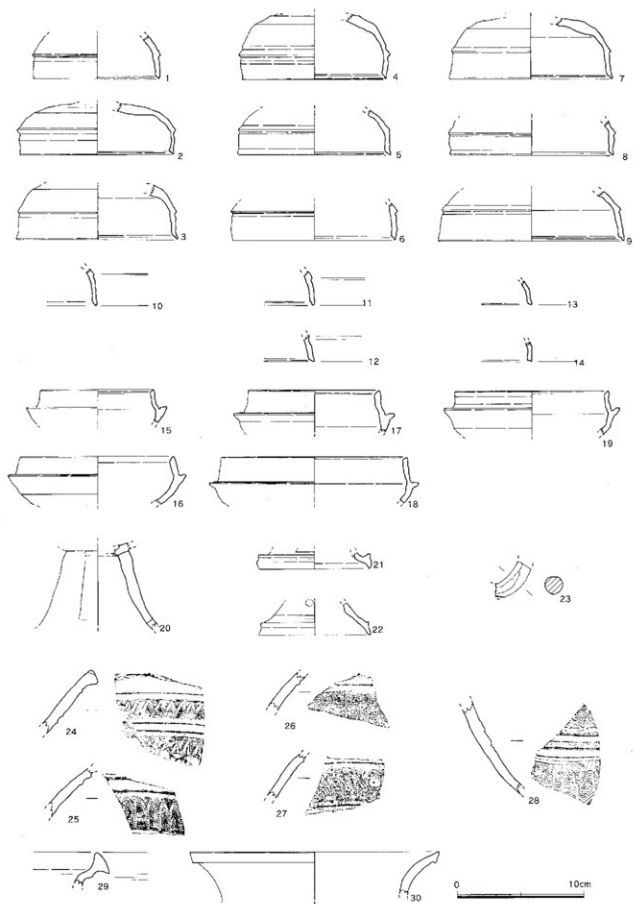


Fig. 15 新開窯跡群採集須惠器実測図 (1/3)

図 版



平野から古墳の立地する丘陵を望む(中央下は今宿大塚古墳(北から))



1



2

1. 谷上B1号墳遠景(古墳の位置は鉄塔の間にあたる)(東から)
2. 谷上B1号墳遠景(古墳の位置は鉄塔の間にあたる)(南から)



1



2

1. 後円部墳丘（南から）
2. 後円部南の平坦部（北から）



1



2

1. 後円部と前方部の接合部（北から）
2. 前方部填丘頂部（南から）



1



2

1. 前方部墳丘前面（北から）
2. 前方部北の平坦部（南から）



1



2



3



4



5



6

1. 後門部1トレンチ南 (北から)
2. 1トレンチ南SX-01 (南から)
3. 1トレンチ南遺物出土状況 (西から)
4. 後門部1トレンチ北 (南から)
5. 1トレンチ北遺物出土状況 (北から)
6. 1トレンチ北断ち割り土層 (東から)



1



2



3



4



5



6

1. 後門部3トレンチ土層 (南から)
3. 前方部2トレンチ南土層 (東から)
5. 前方部5トレンチ (北から)

2. 前方部2トレンチ北 (南から)
4. くびれ部4トレンチ (西から)
6. 前方部6トレンチ (北から)



1



2

1. 石室奥壁（南から）
2. 石室玄門部（北から）



1



2

1. 石室右壁（西から）
2. 石室左壁（東から）



1. 石室奥壁左隅角 (南から)
2. 石室奥壁右隅角 (南から)



1



2



3



4



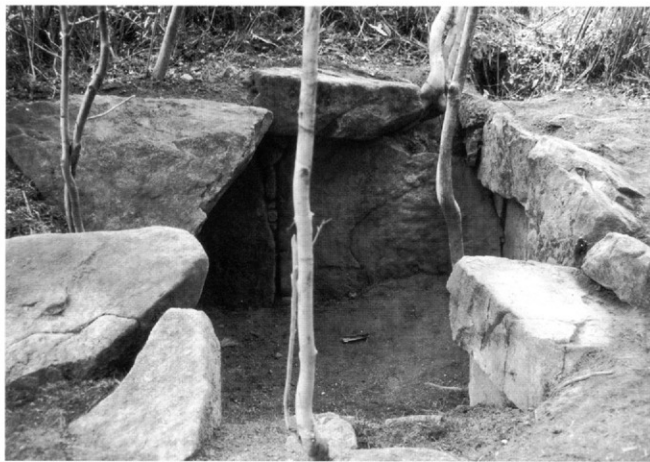
5



6

1. 閉塞部外面（南から）
3. 閉塞部断ち割り土層（西から）
5. 前庭部（南から）

2. 閉塞部外面（北から）
4. 閉塞部断ち割り土層（南から）
6. 前庭部前面の炭化物（南から）

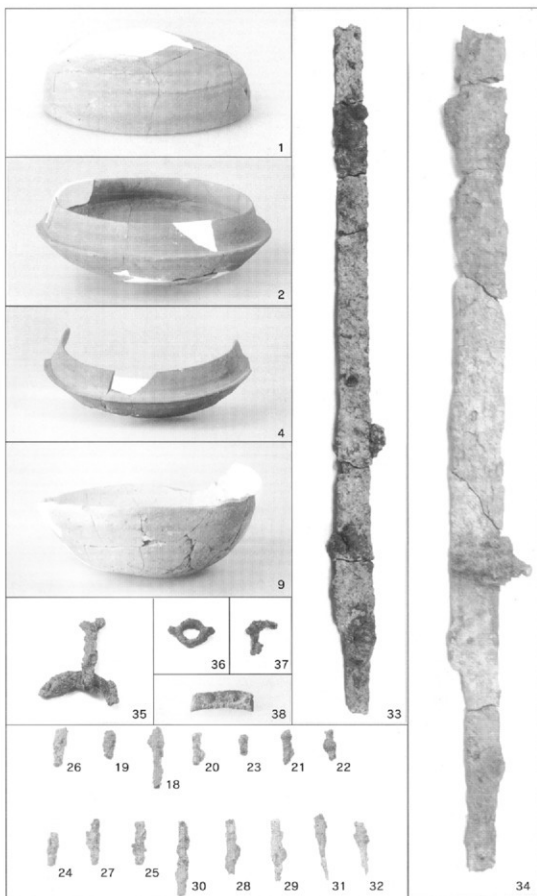


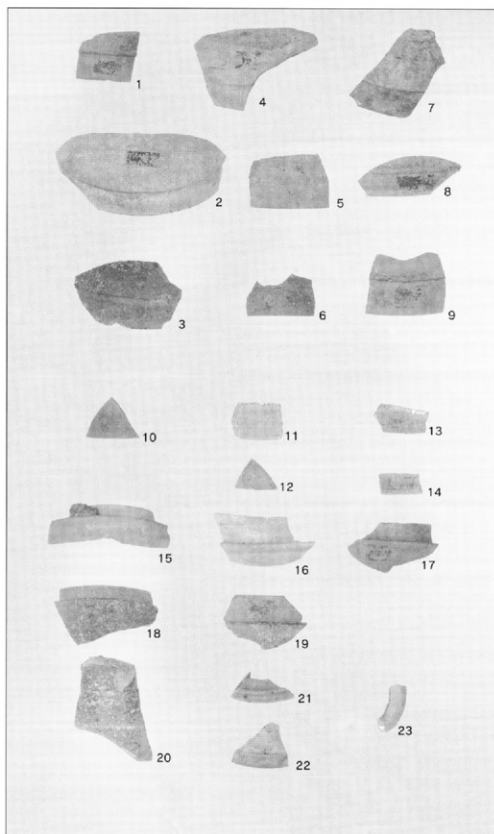
1

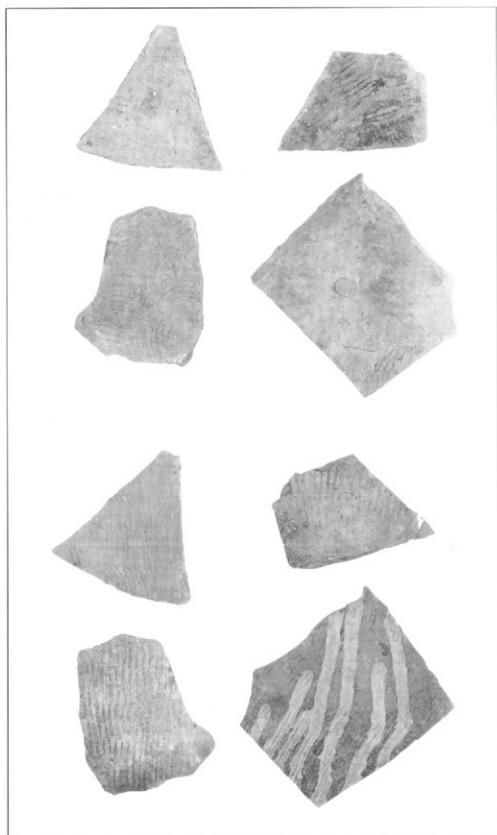


2

1. 谷上B2号墳石室（東から）
2. 谷上B2号墳石室玄門部（西から）







谷上古墳

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第499集

1997年2月28日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
印刷 大同印刷株式会社
